

## ケニアで見た日本の援助・協力

大阪府立三島高等学校 村瀬正則

### 1. JICAの教師海外研修

この研修は、JICA（国際協力機構）が実施するもので、国際理解教育に関心のある教員に対し、発展途上国の社会・教育事情やそこで行われている協力活動の視察を通じ、その経験を授業実践に活かし、生徒の国際理解、国際感覚の養成につなげてもらうことを目的とするものである。研修参加は小論文によって選考された。

全国を3つの地域に分け、さらに小中高の別に派遣国が設定された。私が参加したケニアコースは、近畿・東海・中部の高校教員15名で構成されていた。ケニアへの派遣は3年ぶりだそうだ。

東京で2日間の研修後、全国から集まった百数十人の教員が、9つの国に向けて出発した。ケニア滞在は、2003年8月1日～10日であり、青年海外協力隊、専門家、NGOの活動を見ることができた。募集要項は、JICAのホームページに掲載される。

### 2. 巨大なキベラスラム

ナイロビ市内のキベラスラムに入った。70～80万人が住むと推定されている。乾季でも、道路はぬかるみ。

雨季には、川のようになることもあるそうだ。写真の家の前の白いものは、ゴミ



スラムのごみ

である。行政のゴミ収集はほとんどないようだ。人の排泄物もビニール袋に入れて捨てられている。多くのNGOがここで活動している。そのなかのAMDAの活動現場を視察した。トイレ、道路の溝を作る。木工教室、裁縫教室を開く。HIVエイズのカウンセリングと検査も行われてる。

HIVエイズ対策として、カウンセリングが重視されている。HIVエイズのこわさを知らせるだけでは、検査を受けてくれない。自分の感染を知らずに、他の人にうつしてしまうことが多い。秘密保持を約束し、ウイルスに感染していても、発症を防ぎ前向きに生きることができると説明して、検査を受けてもらう。若いケニア人カウンセラーがHIVエイズと立ち向かっていた。

### 3. スラムの子どもたちの音楽教室

Save the Children Centerは、1982年に日本人3名とケニア人3名により設立され、スラムの生活向上、ス

トリートチルドレンの更正事業等に取り組んでいる。スラムの子どもたちの音



スラムの音楽教室

楽教室もある。ケニア在住の日本人が、彼らの更正のために、日本や現地の人たちの援助をえて始められたボランティア活動である。ストリートチルドレンのなかには将来に希望を持たず、犯罪に手を染めるものもある。

音楽教室に参加するためには、いくつか守らなければならないことがある。そのなかの一つは、シンナーを吸わないことだ。空腹など、生活の苦しさから逃れたいがために、子どもたちの間にシンナーがはやっている。しかし、週1回の音楽教室に参加するために、誘惑に耐えながら一所懸命シンナーをやめるようだ。

子どもたちの歌をCDとして出版し、たくさんの人に聞いてもらい援助を呼びかけている。CDは、ラジオでも時々放送してもらっている。子どもたちは、自分たちの歌声が全国に放送されることを喜び、また誇りにしている。

この音楽教室で、日本に6年間いたケニア人を見つけた。ソウル五輪マラソン銀メダリストのダグラス・ワキウリさんだ。「日本で育ててもらったという気持ちがある。誰かに返したい」と、彼もここの活動に参加していた。ボランティアで活動に参加している元気な日本の年配者もいた。心強い思いがした。

建物の中で説明を聞いていると、子どもたちの元気な歌声が聞こえてきた。ワキウリさんが作った曲やハトぼっぼの歌だ。私も含め、参加教員の多くは、涙をこらえることができなかった。(詳しくは、<http://www.fk-p.com>)

#### 4. ガラクタしかない専門学校自動車科

リフトバレー科学技術専門学校の自動車科では、青年海外協力隊の安井さんが実習授業を担当している。教科書は先生しか持っていない。教材としての自動車は、ガラクタとしか見えない。床には鳥の糞が落ちているが、ほうきも充分にはない。そうじをする習慣がない。先生もしない。「日本に研修に行って、そうじの大切さを知った。」というケニア人がいるようだ。ケニア人ガイドのピーターさんは、「何もないところで、日本人ががんばってくれている。」と感激していた。後日

聞いた話では、安井さんは日本人経営の自動車会社に掛けあって、教材としての自動車を提供してもらおうとしているとのことであった。

#### 5. 広がりつつある授業の工夫

地方のセカンダリースクールを訪問した。日本でいえば、中3から高3までの生徒が学んでいる。教室には照明がない。目のよいケニアの子でも、朝は黒板がよく見えない。この学校に赴任している青年海外協力隊の林さんは、ペットボトルなど身近なものを使った実験に力を入れている。生徒たちが説明しながら実



サイエンスショー

験を披露するサイエンスショーを見せてもらった。前で実験をしていた生徒の堂々とした態度が印象的だった。

ケニアでは、理科・数学嫌いの子が多いようだ。教師はあまり授業の工夫をしてくれなかったようで、丁寧な説明のない講義型授業が多かった。日本の協力で理数科教員の研修制度がつけられている。教員の姿勢を変えることに重点がおかれ、しだいに授業の工夫も広がっているようだ。

日本の援助で、校舎が増築されたナイロビ郊外の義務教育学校(8年間)へも行った。増築のおかげで、1学級60~70人だったのが、40人になった。照明があつて明るい教室だったが、教科書は3人に1冊しかない。

ケニアで義務教育を修了できる子は、50%弱だそう。人々の生活が安定して、子どもたちみんなが学校へ行ける日が早く来ることを願わずにはいられない。